公事根源集釋

下

848
199

帙
入

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199

ガラス使用

○神祇令云季夏鎮火祭季冬鎮火祭義解謂在宮城四方外角卜部等鎮火而祭爲防火災故曰鎮火○儀式詳也○延喜式有鎮火祭祝詞

○神祇令云季夏道饗祭季冬道饗祭義解謂卜部等祭京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者不敢入京師故預迎於路而饗返也○疫癘流布時被行四角四境鬼氣祭對治見東鑑二十六

京城四角　宮城四角四堺　和泉堺　會坂堺　大枝堺　山崎堺　四所ノ鬼氣ヲ祭爲ニ

百五

卜部氏乃人共とうく文城乃四の
すみにて祭事をゆふ共笑をゆ給うん
うりて祭事をゆふ終乃わひ秘納お
されたるもの也祭ほふ物ハ
ゆくゆうや先をト

同日

巽　道饗ノ祭

先ハ疫神乃祭なり
御祓事也ふ
部乃人京城乃四角
方うり祭うと京
よへ立ちん

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』　請求記号 848-199
ガラス使用

陰陽寮ノ人ニテ此四角
四堺（遣ハサル、也）朝儀
羣載第十五ニアリ

補米 ○西宮記九条殿
年中行事ニ云東手於愛ノ
九條年中行支
施米事　東西北各三ケ山妻山使人各十人之中各有二三四五合五手又東手於受宿寺下給之北手於左近馬場
給之西手於右兵衛馬場給之三ケ使進勘文十五巻並人数勘文及米堀勘文等奏聞之自餘文不奏之人数并米
鹽勘文二枚着官所勘造也

之

事なり（ト）卿陣小板（キ）そて人数ノ
勘文（ヲ）と奏聞（シ）給（キ）て（ハ）官厨（ヤ）給（キ）六月乃施米（ヲ）
れ（ル）寮孤獨（ニ）小米（ヲ）給（キ）まて（ノ）
事（ナリ）

在

九條年中行支　雷鳴陣事

雷電之日若其聲盛則左右近衛待仰立陣左右近衛（ヲ）将已上各帯弓箭相分候殿（ノ）腋（ノ）簀外（ニ）孫庇（ニ）就中左（ノ）一間西上北面大将各在次
将之前奏聞中将亦同之　左右将監各葦近衛以上列立殿庭（ニ）左右一列各以中将為上背殿列立（ス）
簀笠於御前（ニ）在之殿并南殿等上侍衛又左右兵衛尉以下（ノ）将監以下皆着蓑笠依而也　又左右近衛人着
陣云々雷鳴止後中納言以上一人（ノ）中納言以上之大将在座者其上（ニ）脱之　右近衛（ノ）将監名称唯一人（ノ）解陣之由奏聞
光（ヲ）召（シ）一脱文　右近衛将監名称唯一人出庭中（ニ）更（ニ）還向（シ）等之儀如左将監左右立定上（ニ）御宣云陣解詞云々
右将監并（ニ）左将監左右立定上（ニ）御宣云陣解詞云々　左
将監還立本列次将監還立了左右共相分列立退出上（ノ）郷（ヘ）退次将監等退下若後宮在別殿分左右近
陣被遣彼宮今案大将在此座者大将可行陣解事歟有左右大将者其上臨可行　若左右大将之外
有大臣者大臣可行歟又大臣祖候陣座大将候御前者大臣更不可奉上歟

庭（ニ）以上（ノ）列（ヲ）
（ノ）目泰三七一
帯度　大将以下帯弓箭
候御前（ニ）孫庇（ノ）額間（ニ）左右
兵衛立南庭（ニ）敷雷鳴御
座（ノ）鳴盛時分陣（ヲ）遣右殿
外（ニ）衛督佐候殿上（ニ）着帯
弓箭候簾中（ニ）解陣
御殿孫庇　海人藻芥云
清涼殿ノ孫庇ト甲ハ檜皮
葺ノ庇ノ外ニ又板庇アリ

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199　　ガラス使用

848
199

陰陽寮ノ人ニテ此四角
四堺ヘ遣ハサル、也朝野
羣載第十五ニアリ

楠米 ○西宮記九答殿
年中行事ニ云東手於殿
宮寺給之北手於右近
馬場給之西手於右兵
衛馬場給之云又人數
并米鹽文ニ枚官勘作
之

公事根源集

（頁）雷陣（カンライノジン）

此事あかつき年中行事には入侍れ
ども又小雷の事をたゞしく
なり雷の事をたゞしく
ふかなりしとみえたり
りてよき夏のおりふし一まきの
しをうけたまはるべし
遅きおりなれば六月條有ふの物語まで
雷の聲をしるしたる大將

（頁）雷陣（カンライノジン）

此事あかつき年中行事には入侍れ
ども又小雷の事をたゞしく
なり雷の事をたゞしく
ふかなりしとみえたり
りてよき夏のおりふし一まきの
しをうけたまはるべし
遅きおりなれば六月條有ふの物語まで
雷の聲をしるしたる大將

（頁）雷鳴陣（カンライノジン）

○西宮抄六
雷鳴陣 大聲三
聲以上 秋節依宣旨立
日泰三七一日
雨度 大將以下帶弓箭
候御前孫庇額間左右
兵衛立南庭敷雷鳴御
座鳴盛時分陣遣右殿
外衛督佐候殿上著靭
弓箭候簾中解陣

御殿孫庇 海人藻芥云
清涼殿ノ孫庇ト申ハ檜皮
葺ノ庇ノ外ニ又板庇アリ

○月令仲春之月是月
也日夜分雷乃發聲仲
秋之月是月也日夜分
雷乃收聲

雷收聲 ○西宮抄六
月 雷鳴陣 大聲三
聲以上 秋節依宣旨立
日泰三七一日
雨度 大將以下帶弓箭
候御前孫庇額間左右
兵衛立南庭敷雷鳴御
座鳴盛時分陣遣右殿
外衛督佐候殿上著靭
弓箭候簾中解陣

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

可檜皮葺ニ時雨ノ音聞王子ハ板庇ヲサシテ時雨者ヲ聞名シトノ爲也

離宮方舍

○倭名鈔十巻芳舍在凝華舍北加美奈利乃豆保又霹靂俗謂之雷也

延喜御宇ニ

○倭名鈔霹靂辟歷二反俗云加美奈利又云止介

霹折也靂歷也所歷皆破折也

○扶桑略記云醍醐天皇延喜八年五月廿六日戊午午三刻從愛宕山上黒雲起急有隱澤俄而雷聲大鳴隣清涼

公事根源十

竿を湯乃沢将まて ら 竿と等 ら く

御殿乃孫廂小作 し て 御門 ら 護 し

奉つ ら なり打置 の 下 い ら れ 簀 と

志てなり 是 を南殿 の 簀子 と

姫 を雷鳴乃陣 ら く 御殿 の 前 れ 通 よ ら く

御宇小清涼殿 也 大内記 讀 申 方

舍 を雷鳴乃陣 と 霹靂 と て なり 物

しきため し ら

七月

神火侍殿上者大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清貫衣焼胸劈天亡年六十四又從四位下行右中辨兼内藏頭平朝臣希世焼顔而臥又登紫宸殿者石兵衛佐忠包髪焼死亡紀藤道雄焼悶亂安倍宗仁麿焼而臥民部卿朝臣載笏節至陽明門外載車暗雨家之人悉亂入侍衆泣之聲禁止不休自是天皇不豫

高岡宰氏ノ小子ニ

此故事十節記出ダリ

百九

廣澤弥四郎家 習

四月小なり〇て ら ことをかなつ ら も

草 七日御 ら 気

内膳司 ら 差 し 給 ふ 瓜 を 食 し 給 ひ

氏乃小子七月七日小死 ら ら 雲鬼と

なりて人小寵病をいたし 給 ひ

表脇をこみ ら ーつゆへ ら 案脇と

りて 差 をまり 差 をまり

のそくといへ ら

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

百十一 乞巧奠 七日 江次第八

先七日なれい義人沖てうど設ひろし
拭取小入くく乞巧奠あり御殿乃庭有
清涼殿辺
清くおほきやくとして 机 黒漆ノ
よく拭あり机乃上ふろ〳〵れ初をへる
つま箏ことをもちて
清くおほきやくとして 机 黒漆ノ
よく拭あり机乃上ふろ〳〵れ初をへる
たなあるひもとをもちて 柱
机の上をとうち地ふこ乃様ありて
机の上ふろ〳〵れ初をへる
綵の糸しき調 琴 笛 等 あきれ
也

○江次第云自御所神下箏一張置東北西北等机上北妻延喜十五年例用

○裏書云立柱有二様常用半呂半律秋調子也

○六百番歌合顕昭歌サタヌク星合ノ空ノシルシトテ秋ノシラベニコトヲタツ也

八月ノ律也唐ニテハ中呂下云

○管絃音義云盤渉調 水音 者一所双名盤渉調者一切経河必有廻曲流入於海故水音名盤渉也

○半呂半律或楽書云黄鐘調大食調律呂之調也平律調也

○顔府烏鵲旗河 漢渡纖女 淮南 淮南子ハ漢淮南王劉安作二十一巻了今淮南子二此事ナシ 纖悉諸記ハ異為作也

人をなり 織 諒闇時猶祭八大嘗内裏穢時猶祭應和
天平勝宝七年小
ちふい享年磯女
如来く烏鵲乃
まさとのべ橋と
う 淮南子 書小みくあり又漫
訪記小云桂陽城乃武丁とのひ人
他通をおこふうていくおふうていく有
七日小磯女河をわたる事をおひて

天平五年 ○續日本紀云聖武皇帝天平五年秋七月庚午始令大膳職備盂蘭盆供養

盂蘭盆 ○釋氏要覽下卷梵語盂蘭此云救倒懸也 ○翻譯名義云盆是此方貯食之器三藏云盆羅百味式貢三尊仰大衆之恩光救倒懸之窘急

翻譯 翻譯名義集一翻譯者謂翻梵天之語轉成漢地之言雖似別義則大同宋僧傳云如翻錦繡背面俱華但左右不同耳譯之言易也謂以所有易其所無故以此方之經而顯彼土之法

御布施の物を以て 天平六年七月小なり一めぐり盂蘭盆を大膳職より給ふ 天平六年七月小なり一めぐり盂蘭盆を大膳職より給ふ 梵語なり 倒懸救器と飜譯也 云心なり 餓鬼 救器 餓鬼 餓鬼 母を 餓鬼 中小なり一めぐり 天平勝寶

相撲節代儀

初日 所司供張東如常 召合之儀但左右大鼓各五面 候日華門外當日 聲然後 奏日時刻 宸儀御南殿御座定之後 左右共於日華門之口 發乱聲 左鼓長一人立鼓上 花等之門 立鼓前以 白幡張之 内侍臨東檻召大將先奏上者依當時無大臣 大將 次親王公卿奏上者 座近衛次將率出 居侍從入自日華門奏上者座次左右大將各執相撲人奏奏上 令內侍傳奏次侍從入自日華門着宜陽殿 西庇座 後日或臨時依仰給件座 于時乱聲 奏樂奏入此間左右三府佐入自日華門 南第一門北上 東西面行列之 音聲人等相列入門南行到承明門東西廊前留立 同前 日依行列圖在別更不委記之 次三府佐事行着春興安福兩殿幕前床子 經列之後上卿仰掃部寮賜御延 於左出居座但其早晩臨時定仰 左近衛將監趨出取版奏入音聲 乱聲 左立奏 厭舞已了 樂人着座次右方奏厭舞已了 樂人着座 樂人座在承明門東 西廊 次太臣依仰候南簀子御簾下 內侍傳召之 次穀倉院賜王卿以下饌內豎役送此間左右立合 近衛各出自相撲屋 相撲屋越立殿庭次左右相撲長二人持四座二枚置相撲屋前壇下次左右籌刺着座次占手童 前一日於御前校定其長短 勝則奏乱聲次垂髮次總角 惣甘番之中 十七人近衛兵衛 以次相撲 取手勝則奏乱聲 元舞次左右各奏舞 仁和二年定吾十三年 節日勝方勝負舞之後童又奏他舞 及日景傾掃部寮

[illegible] 奏音樂 左賜玉 [illegible]

初日 ○司供張装束如尋常召合之儀但左右大鼓各五面候日華月華西門之□發乱聲左鼓長一人立鼓上(赤幡振之)右鼓長二人聲然後奏日時刻宸儀御南殿御座定之後左右共於日華月華西門之□發乱聲左鼓長一人立鼓上(赤幡振之)右鼓長二人立鼓前以白幡振之 内侍臨東檻召文大将先奏上(依當時無大臣為大将可奏上者)次親王公卿奏上著座近衛次将率出居侍従入自日華門奏上著座次左右大将各執相撲人奏奏上(今内侍傳奏次侍従入自日華門著宜陽殿西庇座(後日或臨時依仰給仆座)于時乱聲了奏樂奏入此間左右三府佐入自日華月華西門立宜陽殿下當南第一門北上東西面行列之音聲人等相列入門南行到承明門東西廊前留立同節日依行列圖在別更不委記之)次三府佐南行着春興安福両殿幕前床子(経列之後上卿仰掃部寮賜御筵於左出居座但其早晩臨時定仰)左近衛将監越出取版奏入音聲了左方奏厭舞已了樂人着座次右方奏厭舞已了樂人着座(樂人座在承明門東西廊大)次穀倉院賜王卿以下饌内豎役送此間左右之合近衛各出自相撲屋越立殿庭次左右相撲長二人持四座二枚置相撲屋前壇下次左右籌刺者座次占手童(前一日於御前校定其長短)十七人近衛兵衛以次相撲最手勝則奏乱聲元舞次左右各奏舞(仁和二年定着十三年節日勝方勝負舞之後重又奏他舞)及日景傾掃部寮撤張筵(後日之奏樂了還御本殿王卿退下後日時刻宸儀御南殿内侍召人王卿以下奏一同昨儀仰大臣進候御簾下此間左右次将着春興安福両殿壇上四座次左相撲人進出殿庭御覧了退退次右相撲人進退如左

次抜出(其數臨時隨例)次追相撲(白丁次第)次左右乱聲遍(脱文)天皇御了内侍召人群臣奏上如昨日内侍召一ノ御前相撲白丁了又陣直有仰止奏音樂了或親王以下出居以上有給禄之前又如左右次将出居左相撲人列立御前北面西上有仰向南次向西仰縦即退入右復如此(但東上向南後向東退入)次抜出次追

○翻譯名義云盆是此方貯食之器三藏云盆羅百味式貢三尊仰大衆之恩光救倒懸之窘急

翻譯 翻譯名義集一翻譯者謂翻梵天之語轉成漢地之言音雖似別義則大同宋僧傳云如翻錦繡背面俱華但左右不同耳譯之言易也謂以所有易其所無故以此方之經而顯彼土之法

なをよ〳〵ゐ〳〵ゑ〳〵ゐ〳〵盂蘭盆ゐ〳〵梵語なり
倒懸救器と翻譯せり倒懸救器と倒懸いきつき
ゑ〳〵云心なり餓鬼ゑ〳〵ゐ〳〵ゑ〳〵云
恩をふかくをもふ心なり
一救器いはゆる餓鬼ゑ〳〵ゐ〳〵ゑ〳〵苦をすくふ
いはゆる佛弟子目連ゐ〳〵ゑ〳〵ゐ〳〵ゑ〳〵母
をあはれみすくふ餓鬼の
中ふかくゑ〳〵ゐ〳〵ゑ〳〵ゐ〳〵ゑ〳〵月盆をとゐ〳〵ゑ〳〵
翻譯

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

天平五年 ○續日本紀云聖武皇帝天平五年秋七月庚午始令大膳職備盂蘭盆供養

盂蘭盆 釋氏要覽下卷梵語盂蘭此云救倒懸也 ○翻譯名義云盆是此方貯食之器三藏云盆羅百味式貢三尊仰大衆之恩光救倒懸之窘急

翻譯 翻譯名義集一翻譯者謂翻梵天之語轉成漢地之言雖似別義則大同宋僧傳云如翻錦繡背面俱華但左右不同互譯之言易也謂以所有易其所無故以此方之經而顯彼土之法

御布施 天平六年七月廿五日小自恣僧乃僧を供養し奉らしめ給ふ事 ○日本紀續明天皇二年七月作須弥山像於飛鳥寺西且設盂蘭盆會

盂蘭盆 佛說盂蘭盆經一卷 ○盂蘭盆經云於七月十五日佛歡喜日僧自恣日以百味飲食安盂蘭盆中施十方自恣僧云疏自恣者自口之過惡他所舉又自姿事釋氏要覽下卷詳也

供御人 相撲ノ奉仕ノ人 凱諸國ノ防人也

○雲圖抄相撲節ノ

○六神通 天眼 天耳 他心 神境 宿命 漏盡

相撲 江次第八仁壽殿東庭相撲ヨリ裏書ニ云南殿無出御之時於仁壽殿有召名拔出之義

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199　　ガラス使用

○先一三月比大將以下於陣座定相撲使事
關白大將隨身陣官賭弓矢數者等爲使遣諸國七道召相撲人也方葉ニヨリテカクイフ云也
○コトリハ部領ト書方葉集ニ十相摸國防人部領使駿河國防人部領使類大伴家持進痛防人悲別之心作歌麻須良男能由伎等里於比豆伊田弖伊奈婆和可礼亜乎之美奈氣伎家牟都麻
○江次第云勝方乱聲伝負方勝者退頭右勝者納蘇利均共奏往年取手決時左頭勝右最勝時右先奏納蘇利左奏陵王乱舞云云

東書云勝者退頭右勝者納蘇利均共奏往年取手決時左頭勝右最勝時右先奏納蘇利左奏陵王乱舞者奏他舞云云

○相撲抜出 東書云非中教出之今取相撲人也

宇多天皇紀
○扶桑略記云相撲事從柏原天皇御代至今代〻天皇皆盡好之貞觀以後寂然無事今聖主不捨之亦不樂乎
○又延喜元年七月廿八日丁丑御覽童相撲廿番於綾綺殿有此事

東書云乃合抜出者左右相撲相合也

勝負ありて廿八日小抜出 八月廿八九日小月廿七八日
○江次第云取奏之儀寛仁二年有論二條大閤白先抽勞次取奏文即之次抽次將所持杖後取實大臣見文畢之後取三將所持杖自抽文云抽勞取文或左腋抽勞見文 日暮者不必究竟數止之云云
とり十七番とりて勝乃方乱声ありて
○小抜出とは小相撲とて相撲人の童
覽をそ御覽也 年紀小抜出幸紀小抜出仁天皇七年七月小抜出麻乃比支小男士あり名

事なり 先一三月比大將以下於陣座定相撲使事
關白大將隨身陣官賭弓矢數者等爲使遣諸國七道召相撲人也方葉ニヨリテカクイフ云也
○コトリハ部領ト書方葉集ニ十相摸國防人部領使駿河國防人部領使類大伴家持進痛防人悲別之心作歌麻須良男能由伎等里於比豆伊田弖伊奈婆和可礼亜乎之美奈氣伎家牟都麻
○江次第云勝方乱聲伝負方勝者退頭右勝者納蘇利均共奏往年取手決時左頭勝右最勝時右先奏納蘇利左奏陵王乱舞者奏他舞云云

東書云勝者退頭右勝者納蘇利均共奏往年取手決時左頭勝右最勝時右先奏納蘇利左奏陵王乱舞者奏他舞云云

○相撲抜出 東書云非中教出之今取相撲人也

宇多天皇紀
○扶桑略記云相撲事從柏原天皇御代至今代〻天皇皆盡好之貞觀以後寂然無事今聖主不捨之亦不樂乎
○又延喜元年七月廿八日丁丑御覽童相撲廿番於綾綺殿有此事

東書云乃合抜出者左右相撲相合也

勝負ありて廿八日小抜出 八月廿八九日小月廿七八日
○江次第云取奏之儀寛仁二年有論二條大閤白先抽勞次取奏文即之次抽次將所持杖後取實大臣見文畢之後取三將所持杖自抽文云抽勞取文或左腋抽勞見文 日暮者不必究竟數止之云云
とり十七番とりて勝乃方乱声ありて
○小抜出とは小相撲とて相撲人の童
覽をそ御覽也 年紀小抜出幸紀小抜出仁天皇七年七月小抜出麻乃比支小男士あり名

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

大極殿
○仁王會懸五大力菩
薩像一鋪行之

祈年穀奉幣（コノホウヘイ）

仁王會

八月

八朔風俗

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

建長ヨリ此事有
○桃華禁葉八洞事正
應二年御記云今日家
家乃ヤウナルヲミヲテ
ル人小地ヲソモソモ
事ヲ一ヨリテシテヲ
モヒノ儀ヲ
後深草院御代建長乃
ヒトヒトヲ事ヲ
ル宗尊親王乃時代
ケルヘシ
通方卿 ○餝釼 臨時
公事衣抱 雜衣抱
羽林籠鶴抱 本朝公
草孔 仁王會抱等皆
通方卿御抱也應仁已
來兵亂紛失今餝釼纔
存 其後アヒニ聖運
ヲヒラカ世給 ○古今著

（上部）
ルヲ雲園世落乃風儀ナル或ハ和
小建長ヨリ始テ式事ヲリーメ
ヲヒテ數ヲケテ小久
ヲ法ヲ久ヲ
ヲヲ繼小建長乃ヲヒヲノ事
成會ヲ或說ヲ
ヲヲテ外戚通方卿
ヲヲ時御所ノ閑ヲ

（上部）
ヲ男女密ヲヲ
小聖運ヲヒヲ
ヲテ同御所ヲ
ヲヲ
ヲ實ヲ
ヲ人ヲ法法
事ヲ
ヲ
ヲ

ケシテケリ同三年正月九日
條天皇十二歳禁中ニテ崩
御事又由々シケレハ後堀
川院御方ニハ御位ニツカセ
給ヒ宮モヲハシマサス定テ
法慶院ノ宮タチノ践祚ア
ランスラントテ聞ヘキ人ナ
ケレトモ時ノ卿相雲客四
辻ノ修明門院（ニイリツヽフ
トイヘトモ天照大神御ハ
カラヒヤ侍ケン同十九日関
東ヨリ城介義景早打ニノ
ホリテヒリカニ承明門院ニ
イリテ御位阿波院宮ト
申タテマツル侍也公家ノカ御
ウシロミ侍ラントテ申テカテ法
性寺殿一条大相國ヲ
摂政ニ今下リ又云三月七日御
年廿三ニテ太政官廳ニテ御
即位アリ

○天神事大鏡扶桑略
記愚管抄北野縁起等ニ
詳也

公事根源集釈 三

春二月小おほ
百十九 北野祭
小野ゝ宮ノ神事ハ人まれなる事
ナレトモ右大臣ハ二位菅原智
定卿父ノ参儀
延喜聖ノ御門ハ
経二位是善卿（コレヨシ）（サネ）（キヤウ）と
百八 櫟薗（シヤク）（エン）
四日
二十日

○名目抄定考逆讀之
例也
寛元云谷川氏ノ説六位以上ノ加階ニアル
ヲ云ニテ撰叙令ニ委ニ正月上日諸
司ノ筆頭ニ能アルヲ撰ミ出スヲ定
考トシ式部兵部両省諸司ノ
定目撰成スルヲ列見トシ其ヲ書
集テ奏スルヲ擬階奏トス云故
二月ノ二八ノ誤ナルヘシ二月上
日ハ列見ノ

四年ノ宣命ニハ庶
年七月小祝宮ニ
ヲ参給テ右近ノ馬場ノ小
ヲ参給ヒテ一条院ノ御
ノ参給テ祇園ノ
十一日
定考
ノ青云位ノ
ノ加階ヲ
ノ奏ノ
ノ事
ノ儀式
ノ三献
ノ文
ノ三献

○日本紀三十
上日
○孝令云自八月至正
月上日一百二十日以
上者給春夏禄

公事根源下

うるうの年ヲ
白馬節云ノ黄
参議ノ勤時ノ
す大うるう二月ノ
省ノ位田ノ
ヲ列見トイフ
ノ擬階ノ奏
おいてうるう
ノ文字ヲ
うる年ノ

胎中天皇 ○日本紀十七住吉神初以海表金銀之國高麗百濟新羅任那等授胎中譽田天皇 此胎中心仲哀天皇時住吉神海表國ヲ征タマヘト勸タマヘル仲哀天皇信シタマハス神ノタマハク此國ヲ得タマヘルハ今神功皇后ハラミ坐セリ其子ニエタマフヘシトノ事ヨリテ胎中号アリ

譽田天皇 ○譽田、昔射時右手ニ鞆云物ヲ掛母后三韓御退治時鞆負タマリシニ依タマヘテ御誕生時左御手ニ鞆如ナル瘤生シタマリ仍テ号タマフ天皇申シタマフニ依譽田ハ鞆ノ假名也日本紀ヲ考ヘシ

叙令小子ノ記シ置キ事ハ

なし 江家ノ一也 ○一説有リ

考シテ大鞆ノ字ノ

約如事ヲ

百寮 石清水放生會 十月

閑暇ナキ事ナレハ宮令ノ内

辨參府ヲ

差察ヲ使ハシ心ナラヌ物

參ラヌ人ヲ 中十六代ノ御門應神天皇

此御事ナル仲哀天皇ノ御子

○菱形池豊前國宇佐郡アリ○記宣集ニ菱形者三山之總名也北辰影向之地也峰形如菱之角三山者一龜山在北方似龜形山号小倉二大尾山在東爲龍山尾三官山菱形耶小倉乃山之下津石根宮柱太敷立是也○又云菱形之稱斯峰之體如菱之角非一山之秀分三方而崎於松林之間有自然ノ池隨山總名之故稱菱形池

○紀貫之歌

豊國ノ菱ノ池ニ菱ノ根ノトルトヤイモカ袖ヌレケリ

神母ハ神功皇后也胎中天皇ヲモ又ハ譽田天皇ヲモ名付事ハ

奉ラル天下ヲ

四十一年百十

三十代

欽明天皇ノ

築豊前國

築紫ノ筑紫ノ國ニ

給ヒシ

巡狩ヲ給ヒシ

とゝめんとするなり又神託宣に
和光の濁りきを厭てなちかふ動靜ア
らそされとも勅使なとの行宮に於ても
き清和の御時なれ共靈驗ありて今も
かはらす山石清水八幡の大安寺僧形の
かなり「江次第十二有宇佐使事」一代に一度宇佐にも勅使を
て御つとめ二百餘の宗廟とゝめ大照大
神宮小僧不動

菩薩と御名の御託宣小僧通來不動
法性示八正通禽獲迹垂解脱若衆生
故号八幡大菩薩とあり八正の内無
二見二惠惟正語二業二命二精二定
念を八正通とて心正ありて
辛酉十二月二日夜見瑜伽論改 始念作事 身口意
名のつゝきてよまりこ業は邪な
らすして内外ともに清浄なる故に
や源とも神明の靈迹もこれをこそ
めや又八方よ八通乃八幡とゝめ給事
あり「習合說也」「一本習作習非也」
習ふ方の法施なこ眼耳鼻舌身意

得道來ル御託宣ハ
勝尾寺開成告タマフ御
託宣也此ヨリ以來大菩
薩号ス桓武天ノ名
○日本紀欽明紀訓
○解脫ヤスラカニスカル

八正道 ○彌勒菩薩說
瑜伽師地論卷第六十
七攝決擇分中聲聞地之三
問何因緣故正語正業
正命說爲戒蘊答二因
緣故一依正受用法故
二依正受用財故謂正
語正業戒爲根本戒爲
所依方能受持一切正
法是故說名依受用法
由正命故不依矯詐等
起邪命法求衣服等此
爲根本此爲依處正受
用財是故說名依受用
財又於是處世尊說爲
增上清淨意現行性此
中依止貪等起犯戒思
依止矯詐等起邪追求
衣服等思若離此事應
知是名增上清淨意現
行性 問何因緣故正
見正思惟正精進說爲
慧蘊答由此慧蘊略有
三種作業因此三法方
得究竟謂通達諸法眞
義是初業通達諸法眞
義已即於眞義爲他宣
說施設建立分別開示
令其易了是第二業爲
斷除結法隨法行是第
三業如是三業由正見
正思惟正精進故如其
次第而得究竟 問何
因緣故正念正定說爲

定蓋答二因緣故二一由自性故二一由所依故由自性者謂三摩地由所依者四因緣故念於此定能作所依一繫所緣故謂於四念住觀攝其心二隨順定故謂由此念於守護根門正知而住順歡喜處隨念作意中能隨順定三能斷蓋故謂於各別不淨觀等諸蓋對治作意能斷諸蓋四極多修習相作意故謂遠離者於止舉捨相無間殷重加行中能多修習是故此念爲定所依

八色幡○八色幡即應神天皇御正體幡神也幡軍陣大事物出陣時先幡ノ祭ル古禮也

三昧耶形○空海四種曼荼羅義云且於畫造諸尊者以五大五色畫作影像者大曼荼羅造所持刀劒遮擧等二昧耶曼荼羅捏鑄刻等像羯磨曼荼羅畫三十七尊等種子字者達磨曼荼羅○又云三昧耶形ノ略ナリ三形ト云陰陀三尊拾芥下本

古人翻檀新人翻輪圓具說 袈裟上ニアリ

阿彌陀三尊觀音勢至脇也○衣笠內府歌石清水スミハシメケ月影ノニフネカゲソウツレル

續古事談第四行教和尚一夏九旬守佐宣籠テ晝ハ大乘經ヲ讀夜ハ眞言ヲ誦シテ法樂ニ奉テミツルヘシト給ヒケレハ淚ヲ流シテ十日延テ御體ヲ見奉テミツラント泣ケレハ

三千ナントスル時我王城ノ近邊ニ向テ國家ヲモリタテマツラント託宣ト給ヒケレハ是ヲ見奉ントテ七條袈裟ノ上ニ字ヲ非ス繪ヲ非ス阿彌陀ニ尊現シ奉ラントテ行教此御姿ヲ寫シ御覽ニキ此事ナルヘシ紫雲タナヒキテ王城ヲ覆ヒ御殿ノ預御座ヲヨク時ウロ金ヲ敷此內殿ノ中ハ常ニカクハレキ香ヲ燒ケリ

○翻譯名義集七袈裟條ニ此由ヲ奏スル帝ノ御夢ニ男山ノ上ニ紫雲タナヒキテ王城ヲ覆ヒ御殿ノ預御座ヲヨク時ウロ金ヲ敷此內殿ノ中ハ常ニカクハレキ香ヲ燒ケリ

袈裟上ニアリ

○翻譯名義集七袈裟云具云迦羅沙曳此云不正色從色得名章服儀云袈裟之目因於衣色如經中壞色之衣也會正云雜此本但是草名可染衣故將彼草目此衣號十誦以爲數具謂問色無染之形唯分以爲卧具謂問衆被之類薩婆多云卧具者三衣之名大淨法門經云袈裟者晉名去穢大集名離染服智論名出世服眞諦雜記云袈裟是外國三衣之名名含多義或名離塵服由斷六塵故或名消瘦服由割煩惱故或名蓮華服服者離著故或名間色服以二如法色所成故言二五者雜有二種壞色青黑木蘭赤樹謂鋼青皂謂雜染不關赤樹皮也業疏云聽以赤截成衲多不純惡賊所剝故云應法師云翻作壞色淨音加沙曳洪字苑始改從袈

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

最勝王經 金光明最勝王經十卷唐三藏法師義淨奉制譯

○金光明最勝王經卷第九長者子流水品第二十五爾時佛告菩提樹神善女天爾時長者子流水於往昔時在天自在光王國內療諸衆生所有病苦令得平復受安隱樂時諸衆生以病除故多修福業廣行惠施以自歡娛即共往詣長者子所咸生尊敬作如是言善哉善哉大長者子善能滋長福德之事增益我等安隱壽命仁今實是大力醫王悉能普救一切病苦如是稱歎周徧城邑善女天時長者子妻名水肩藏有其二子一名水滿二名水藏是時流水將其二子漸次遊行城邑聚落遍空澤中深險之處見諸禽獸豺狼狐獾鵰鷲之屬食血肉者皆悉恐怖飛一向而去時長者子作如是念此諸禽獸何因緣故一向飛越我當隨後觀往觀之即便隨去見有大池名曰野生其水將盡於此池中多有衆魚流水見已生大悲心時有樹神示現半身作如是言善哉善哉善男子汝有智義名流水者可愍此魚應與其水有二因緣名爲流水一能流水二能與水汝今應當隨名而作是時流水問樹神言此魚頭數爲有幾何樹神答曰數滿十千善女天時長者子聞是數已倍益悲心時此大池爲日所暴餘水無幾是十千魚將入死門旋身宛轉見是長者心有所希隨逐瞻視日未曾捨時長者子見是事已馳趣四方欲覓於水竟不能得復望一邊見有大河名曰水生時此魚即便昇上折取枝葉爲作蔭涼復更推求是池中水從何處來尋者覓不已見一大河名曰水生時此河邊有諸漁人爲取魚故於河上流懸險之處決棄其水不令下過於所來處卒難修補便作是念此堂深峻設百千人時經二月亦未能斷況我一人而堪濟辦時長者子速還本城至大王所頭面禮足却住一面合掌恭敬作如是言我爲大王國土人民治種種病恐令安穩漸次遊行至其空澤見有一池名曰野生其水欲涸有十千魚爲日所暴將死不久唯願大王慈悲啓念與二十大象暫往負水將彼魚命如我與諸病人壽命爾時大王即敕大臣速疾與此醫王大象時彼大臣奉王敕已白長者子善哉大士仁今自以至象厩中隨意選取二十大象利益衆生令得安樂是時流水及其二子將二十大象又從酒家多借皮囊往決水處以囊盛水象負至池瀉置池中水即滿溢還復如故善女天時長者子於池四邊周旋而視時彼衆魚亦復隨逐循岸而行時長者子流水告其二子汝取一象鼻大力者速疾還家中至祖父所說如上事收取家中可食之物置於象上疾還父母及以妻子奴婢之分悉皆收取即可持來時二子受父教已乘最大象速往家中至祖父所說如上事收取家中可食之物置於象上疾還父

おこりぬ 元日雲圖拾遺 (改事要略 大隅日向隼人云云)

かくもくらくてありそはのうらの

てりもせぬ菩薩乃御子誕生 (一説)

あまくだりしてこそ

みつき事 家勝王記 長者子流水品

池の底の事ともなし

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199　　ガラス使用

所王彼池邊是時流水見其子來身心喜躍遂取飯食偏散池中魚得食已愍皆飽足便作是念我今施食令魚得命願於來世當施法食克濟無邊云云佛告善女天爾時長者子流水及其二子爲彼池魚施水施食并說法已俱共還家是長者子流水復於後時因有聚會設衆妓樂酣酔而臥時十千魚同時命過生三十三天起如是念我等以何善業因緣生此天中便相謂曰我等先於贍部洲內隨傍生中共受魚身長者子流水施我等水及以飯食復爲我等說甚深法十二緣起及陀羅尼復稱寶號如來名號以是因緣能令我等得生此天是故我今咸應詣彼長者子所報恩供養爾時十千天子即於夫沒至贍部洲大醫王所時長者子在高樓上安穩而睡時十千天子共以十千眞珠瓔珞置其頭邊復以十千置其足處復以十千置於右脇邊雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華積至于膝光明普照種種天樂出妙音聲令贍部洲有睡眠者皆悉覺寤長者子流水亦從睡寤是時十千天子爲供養已即於空中飛騰而去於天自在光王國內處處皆雨天妙蓮華布諸天子復至本處空澤池

猪鼻

十五日上皇下院神幸道路上院南門ニ大坂ヲ經テ猪鼻ニ到下院南門ニ入也

猪鼻坂由緒也

○庫詠下朝有紅顏路世路暮爲白骨朽郊原慶滋保胤

○古今六帖觀政要二下特露禪慮

勅使牧 ○延喜式四十八左馬寮式御牧事詳也

石竹二 駒牽 十五

信濃勅旨牧十六箇所延喜式所載之一也

くらゐ信濃の勅旨牧九駒を引き給ふ

御馬解文
○國々ヨリ貢御馬ノ送状也

御馬ヲ給ハル
○江次第云大公卿以下一々給御馬桶物取綱牽出一拝畢退出歸テ著座

引分使
○江次第引分事是可被奉一院　春宮執柄也
○又云並立御馬於庭前先引分令讀人直引出　一院執柄使次將春宮使内裏者坊司來受之或遣將主馬署

又甲斐國穂坂（五十疋）
○此文西宮記依テ書之ヲ

保元物語上ニ云ヘル如ク八月十五日ニモアラネドモ左馬寮ノ御馬ノ事ハ國々ノ牧ノ駒ト云ル官使ヲ坂ノ上ヨリ次第ニ牽下ス事ニテ候ヘバ其ノ日ニ限ラズ候ヘドモ今ハ恒例ノ儀ニ依テ其ノ事ヲ記シテ置ク所ナリ

武蔵國小野ノ御馬單疋ヒキ參ル
秩父御牧ヨリ參ル
年少ニテ乘ル女ニ日ニ依テ或ハ二日或ハ三日ニ一度ナド小野御牧ノ御馬ヲ女ニ乘ル事ナリ

百十三 季御讀

二月八日
九月
臨時御祈

二日

百七五

不堪田奏

七日 弐日九月五日

不堪田事

今月晦日以前進坪付帳九月一日申大弁当日申上七日奏

損田事

預言上損田十月廿日以前進坪付帳十一月一日申文弁当日申上七日上奏或停遣使免三分之二或遣使全實檢

或進坪付帳言上可被免二分并一分大半損之状或仕申請被裁許或従停止其奏報云有損可進坪付

帳而不進上可返却者

[illegible] 不堪定

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百五十五 不堪田奏（カンデンノソウ）

七日 弐日九月五日

去ル弘仁年中ニ諸国ノ田ノ稲ヲ一束ニ付（ツケ）テ稲ヲ一束ヲ加（クハヘ）テ奉ルヘキ由ヲ令（レイ）ス。仍テ

諸司供奉之（掃部寮立文臺二基一基立於殿東第四間時刻天皇御南殿左右近衛引陣天皇就御座左右近衛称警蹕内弁大臣着軟乕子内侍臨東檻召大臣大臣起座称唯進到左仗南頭謝座昇東階着座皇太子昇自同階謝座謝酒者座所司開門闈司者座大臣召舎人二聲少納言侍座親王以下称唯謝座謝酒了上下群臣座定内蔵寮給紙筆（先例未置紙筆云々）中務式部録持簡入自東西腋門點檢侍從文人等見奉大臣起座奏云令献題勅許了大臣復座召奉議奉大臣仰進簀子敷其儀如御酒勅使儀或（他博士二人召文章博士或一人或不奉例）就而跪矣大臣取座下硯授博士（是兩文章博士或文章博士不奉例）立大臣座後仰云献題博士称唯而跪矣大臣取座下硯授博士（是兩文章博士或一大臣大臣揔笏取筥自王卿大盤上進御座東奏聞御覧返給（或有仰令分韻字或令勅韻或一定了令書一通口殿上座博士等如初入墨筆持筥返置本所退降経前道還着幄座若有探韻後内弁起自東第三間（若内弁用第三間自當御出云々）南進下簀子敷就探韻案南揔笏開筥蓋置韻呼盛器自案東間北進到御座東跪奉之天皇探給被仰某字内弁退還如進儀返納遺韻覆筥蓋按笏復本座（西本座若王卿以下堪属文者起座出自東簀子敷進西跪而探云［　　］還復本座如進儀次内膳盛供上下群臣起座大膳盆賜臣下一觴之後国栖奉風俗三献之後内教坊別當納言取奏令内侍傳奏勅使事如例但他節會日召在東西幄大夫各二人而今日者乍四人召東幄南渡馳道就西幄次奏奈久音聲次奏調子樂前大夫二人（不帯剱笏帯假帯）舞妓女進到右近陣立東南昇幔東東面次舞妓及樂人等着座奏調子樂二人大夫還入殿上地下文人等各就文臺下申官姓名跪開筥献詩樂了上下群臣列庭中拝舞（謂之女樂拝）後拝舞式部輔取座中文臺筥立東階頭左近少将昇自同階取殿上筥還降取重輔所持筥而進置公卿座之西南頭（待樂声止取文臺筥之間見天長三年九月九日宣旨）後大臣奉勅令召博士等其次第如献題之時主殿司取脂燭候親王座後障子戸下近衛中将二人昇自東階進経親王座後到戸下取脂燭一人便候御帳艮角一人経王御座東南而候御帳巽角王卿及講者博士進候御帳東（親王北邊公卿及博士南邊）大臣取文臺筥蓋置講者前大臣取詩最帳筥上先讀最末句

文十枚訖講之若有御製大臣給之（講者取詩最帳筥進置御座前大臣取之）

等退下王卿復座大臣奉宣命見奈等自餘儀如常

同日無節會於豆陽殿賜酒饌侍從以上其儀如二孟平座但延喜十三年九月九日後藤上卿拂取氷魚置臺盤上召内豎令分下勅使令坐式部御親王禄法皇太子三百屯（文人加一百屯）一品百九十屯（文人加一百屯）二品百七十屯（文人加一百屯）三品百五十屯（文人加一百屯）四品百世屯（文人加一百屯）無品七十屯（文人加一百屯）太政大臣二百五十屯（文人加一百屯）左右大臣二百屯（文人加一百屯）大納言百世屯（文人加一百屯）中納言百屯（文人加一百屯）三位参議七十屯（文人加一百屯）四位参議五十屯（文人加一百屯）一位百世屯（文人加一百屯）二位百屯（文人加一百屯）三位五十屯（文人加一百屯）五位十五屯（文人各加一百屯）六位以下文人十屯（以上文人加三十屯）四位世屯（文人加一百屯）五位廿屯（文人加一百屯）外

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199　　ガラス使用

百五十 不堪田舎

老の法師乃田乃猶そ一とゝて奉それよつまゝ秋稔ニ
ゐることゝ先ゝ給
猪鼠ゝ淨(ツカ)付帳ゝ
ゐきゝゝゝめ
行ゝゝ堪定ゝゝ
必不堪田ゝゝゝ
事うゝ

百五十六 重陽宴

七月 弐日 九月五日

九月九日ハ菊の花を酒に浮めて飲ゝ事ハ
つゝゝ之ゝ重陽宴ゝ
月とりゝ九陽乃数ゝ
はいゝゝ古ゝ支那ゝ
菊会ゝつゝニゝ
めゝゝ其辺乃いゝ
又墓ゝゝゝ
めゝゝゝ
ゐゝゝゝ
月御帳乃ゝゝ

菊花宴 ○延喜掃部寮
弐九月九日菊花宴神
泉苑殿ニ供御座及設
参議已ニ座又幄下侍
従文人等座
九月九日 ○書言
故事魏文帝書歳往日
來忽逢九月九日九爲
陽數其日與月並應故
曰重陽
○花宴河海抄ニ云探韻
各分一字詩也

三中行支分合二十七番
菓子ゝゝ水菓を取て
ゝゝゝゝ酒のさうき

費長房ノ事

○續齊諧記云汝南桓景隨費長房遊學累年長房謂之曰九月九日汝家當有災厄急宜去令家人各作絳囊盛茱萸以繫臂登高山飲菊酒此禍可消景如言舉家登高夕還見雞犬牛羊一時暴死長房聞之曰代之矣今世人每至九日登山飲菊酒帶茱萸囊是也

菊酒をのむ事

一日 重陽 例幣

十一月 江次第九

○昔八省院ニ行幸ありテ

喜式太政官式云凡九月十一日行幸八省院奉幣於伊勢大神宮其使者太政官預點五位以

九條年中行事

十一日奉幣伊勢太神宮事 廢朝

早朝供御湯殿主殿寮假御禊於日華門外天皇著神態御服 無文御冠 重平緒表衣同御下 上卿令持內記進弓場殿 令奏但今日奠臨時祭例宣命也仍不奏草文只奏清書仰臨時可有別文之事 雖例宣命又可奏草 給鈴 此日依慶 無鈴奏 此間御輿輦於南階不称警蹕之不著靴御禊到中重之間尋常行幸大將召大舍人而令日依神事不召天皇御大極殿後殿平敷座 中央南面先置幣帛後鋪上也外宮幣帛在南 太神宮幣帛在北 內東腋座 西上南并外記史生預嘉喜門內西腋座 典侍以下幕隔之 大臣前也少納言率大舍人侍小安殿東孱慢外左右近將監各率近衛一人相從也天皇召舍人二聲大舍人四人更西向同音称唯少納言代之趨入孱慢內膝行就後版位勅曰中臣忌部召少納言称唯趨經東福門於昭訓門東壇召之中臣忌部称唯率後取者參入就版 忌部就後版位 中臣就前版位 著木綿縵 此間大臣起座經廊內就東福門南西腋平敷座內記捧入宣命之笥而假外記同隨也大臣著座了外記內記者同門內東腋座勅曰忌部參來忌部称唯昇殿跪拍手執幣退跪砌下傳授後取者後取受復本座忘部復進拍手執幣下復本所又勅曰中臣參來中臣称唯退下出左右馬寮御馬各二匹牽於昭訓門外大臣召外記令召使召內記來取宣命笥大臣還本座訖之天皇御宮

費長房ノ事

○續齊諧記云汝南桓景隨費長房遊學累年長房謂之曰九月九日汝家當有災厄急宜去令家人各作絳囊盛茱萸以繫臂登高山飲菊酒此禍可消景如言舉家登高夕還見雞犬牛羊一時暴死長房聞之曰代之矣今世人每至九日登山飲菊酒帶茱萸囊是也

菓子

菓子をのむ

夏也

例幣

十一月 江次第ノ九

一日ちかいかいし

人參內をもつ

例幣を伊勢奉

行文へ御幣を

もつ奉行より

御幣使乃事

ちかいかいし

菓子を參內

人をもつて

例幣を伊勢奉

行文へ御幣を

もつ奉行より

御幣使乃事

加常下御ナリテ平敷ノ
御座ニワタラセ給大床子モ
ヨヘリ所ノ〻布衝立障子
ヲヘタテ隔ヲ東ノ御厨
子ノ間ニ御幣ヲ最下奉ニ
ヲク異ニムケタリ次ノ間ニ御
褥ノ御座ヲ設ク常ノ如ク先
御湯殿ノ下リ上卿廊ノ
座ニツキテ宣命ヲ奏ス帛御
服ヲ奉テ内藏寮御褥ノ
御座ニ着セ給御笏ヲ召テ
先御拜ノ次ニ舍人ヲメス二
聲少納言參テ版ニツク中
臣忌部メセト仰ラル少納
言唯テ仰ヲ奉テ高ク稱唯
ニテ退テ出中臣忌部ニ
イリテ版ニツク先忌部ヲ
メス忌部參リテ外宮ノ
御幣ヲ執リテト部ニ傳フ
其後內宮御幣ヲ忌部

カニハテニテトリテタカク捧
持テ版ニカヘリツク次ニ中臣
ヲメス中臣祭主參テ御
幣タテツ安ノ千ニ跪ヨク
申テ奉レト仰ラル中臣稱
唯ニテ出使ノ三御馬申
事ナト恒ノ奉幣ノコトニ神
祇官東門ヲ出テニ条ノ
大路ニイタルホトニ御座ヲタ
ヽ給數言蹄ノ聞ユルホトニテ
還御常ノ如シ

使王 次第ニ云吏王可
給馬ヲ以外記付藏人被奏歟

神風伊勢國 ○神風ハ
伊勢ニ云枕詞也神武天
皇ノ御諡伽牟伽能ノ
伊賀能宇須ニアリサレ
ヨリ始ル日本紀ニアリ何ナル
故ニ神風ノ伊勢ニ云ソト云ニ
伊勢國風土記ニ云天伊

乃御門ヲ入ルニ事ナシ四ノ
國ノ御神納受アリ事ナシ四ノ
仁天皇ヨリ今ニ至ルマテ
ヨヽノ帝王ノ御門ヲ入ルニ
ヨヽノ御神ヲ納ヲ奉ル
ヨヽノ御神ヲ納ヲ奉ル
ヨヽノ御神ヲ納ヲ奉ル

…ゝま天皇南殿ニ出御ましく…
…ある是を…
…乃後朝奏…
…なあまし…
…夏ふむ…
…已ニ捨取之…
…座ある賜ふ…
…まをとしはよ…

百三十 永子餅

…貞江次第事ヲ取用又ハ捨不用大略ヲ書ルト也

裏書件氷魚差醢等給公卿ニ云々

…ゝ…

…ゝ…

…ゝ…

近江國氷魚網代各一
處其氷魚始九月至于
二月晦日貢之今案近
江田上網代モ名氷魚
ヲ山城ノ宇治ニテ取トイヘリ
イハ俗名鮒云鮒者聲
切韻云鮒音小今案俗
云氷魚是也
初學記冬事對雖有氷
魚霜鵠之文而未其義
非白小魚名也仍白魚長
一二寸者也

○西宮云冬ノ賜氷魚來
女取氷魚盤立座前庭
一人名内豎云參進公
卿分取云云○宇治網代
木ハ氷魚ヲ取爲也後宇
多院御宇沙門慶專ノ
奉請ニ依テ弘安七年二月
廿二日官符ヲハジメテ網代
停廢セラル

百卅二 射場始 公 五日

先此日三百小兒等場ノ
ニ集テ射ヲ
ス此日天子ノ
ヲ御覽ル也
射ハ天子
ヲ御覽ル也
射ハ天子御
ヲ御覽ル也
ナシ誠ノ武
ルヲ
ノ今天子モ
ル道ヲ
ヲ

百卅三 興福寺濟美會 旨

昔菊蕊ノ
ヲ
ト云テ十月ノ
ル
那波詩ヲ作酒
ヲ
ナシ

百卅三 興福寺濟美會 旨

九月廿日ノ同南圖壹所

茶子餅 十月亥日餅ヲ
食スレハ

○政事要略
第二十五羣忌隆集云
十月亥日食餻除萬病
徐鉉初學記卷之二十
六雜五行書曰十月亥
日食餻令武人無病

朔 ○俗名鉢揚氏族語
拾云射禁以久反止古
跡世間云阿無豆知今
按又用朔字

○江次第殿東欄下數
小筵二枚其上供半帖
高麗 殘菊

○菅家文草第五殘菊
菊各分一字應製序云
黃華之過重陽世俗謂
之殘菊○類聚國史七
十四桓武天皇延曆十
六年十月癸亥曲宴酒

聖徳太子

酬皇帝歌曰已乃已呂
乃志具礼乃阿米爾菊
乃波奈知利曽之 奴倍
波阿多良蘇乃香平賜
五位已上衣被

長岡大臣 ○房前之孫
真楯第三之子也延暦
十八年四月十九日任
右大臣弘仁三年十月
六日薨

春日明神ノ ○新古今
三榎本明神ノヨミ人ノ歌
トリ○新古今第十九
神祇歌 補陀落南ノ
岸ニ堂タテ今ソカヘル北ノ
藤波 此歌ノ興福寺ノ
南圓堂ツクリハジメラレ時春
日ノ榎本ノ明神ヨリ給ヘル
ケルトナン 榎本明神諸
神記云白春日社地坐

神也号白勢姫明神
又一書云榎本社者猿
田彦神津姫命也

補陀落南岸 ○尋尊御
記云興福寺 名観音
寺自昔古寺也厩坂寺
事也補陀ラクノ南岸ノ
詠歌此故也

山階寺トモ申ス元要記
第一巻云天智天皇即
位八年大織冠ノ嫡室鏡
女王奉為大織冠山城
國宇治郡山階郷ニ伽藍
立テ丈六釋迦像ヲ安
置セラレシ山階寺ト名ノ
次ニ天武天皇即位元年
壬申都ヲ大和國高市郡
遷サレシ時山階寺ヲ被
郡厩坂移造リキ仍號厩
坂寺元明天皇即位二

てゝ妙法乃大會を
月六日長屋大臣 ○房前
もの閑院賜たゝ
御子ゝ
めくもゝ也
南圓堂乃本
為小田天王
招ひ
補陀落乃南
ラクノ山谷詩十九云海岸孤絶處補陀落伽山譯者次謂小白花山
神記云白春日社地坐

春日神

百済 維摩會

百六十日小
毛六月廿日
十日 問 無福

乙酉和銅二年都大和國添上郡平城宮遷ナリ此時大織冠ノ子淡海公ト春日勝地被立伽藍此時改額号興福寺同七年甲寅被遂供養此一寺之内被建立堂塔十九也

○維摩詰所説經十巻第五巻有問疾品

十六日癸丑大織冠乃御忌日也号談山大明神興福寺ハ大織冠乃御願寺ナレハ維摩会ヲ被行也維摩ハ毘耶離城ノ長者ニテ大織冠病惱ニヲカサレテ山階寺政事要略第廿五巻出タリ

和銅七年政事要略慶雲二年十月

朝之爲朝蓋是會力政事要略維摩會右先正一位太政大臣奉爲聖朝安隱社稷無窮講發弘誓始開斯會

大粮申文

○江次第大粮申文十月申一ノ上加陣申之

勘文一枚申之如例申文ハ依義御爲左大辨式時作大粮諸司諸衙有定國　院宮隨特出入爲闔月之時又頗作代其後成官符近代諸司院宮不持官符成催牒諸國物以件請文成奉知符依可催

則此一ハ如ハ大臣ノ御病ナレハ御祈ノ為ニ諸寺ニ誦経ヲ被行也

洞七ノ小法海ニ興福寺ノ維摩會ニ私ノ御祈ノ為ニ山會ヲ被行也

開三國會需興福寺ノ維摩會ノ為ニ三國ノ封戸ヲ被寄也

百廿五

大粮申文

○謝恵連雪賦盈尺則呈瑞於豊年之褒文則表冷於陰徳　久之雪降月出度事ナレハ暫モ見參スル也

藤臺ニ倭名鈔飛香舎在弘徽殿北布知　豆保

○禁秘抄藤壷藤懸桃手木上古非桃手ノ木歟近比咲勝物也

○禁秘抄云年内雪ハ蒙催所衆瀧口參春雪ハ蔵人必可參

百廿六　初雪見參

百廿七　御贖相

百廿八　依忌火御鋸

百廿九　御屠蘇

十一月

一日

肥後守清原元輔女一條院皇后之時女房　清少言記所乗三四人參リアンナリ

枕草紙第二物ノヤハラニヲセガホナル物十二所ニ詳也

○白虎通八班固作也
曰虎通三巻三正章
禮三正記曰正朔三而
改文質再而復也三微
者何謂也陽氣始施黃
泉萬物動微而未著也
十一月之時陽氣始養
根株黃泉之下萬物皆
赤赤盛陽之氣也故周
爲天正色尚赤也十二月
之時萬物始芽而白白
者陰氣故殷爲地正色
尚白也十二月之時萬
物始達字也而出質黑
入得物功故夏爲人正
色尚黑

中勢増ゟ物多乃屆をなすをもつて
ゟ南屆小ゟ御ゟ
ゟ御ゟき御ゟ門ゟ
周乃屆ゟ十一月
家ゟ
月ゟ二月ゟ
今ゟ二月ゟ
二陽ゟ
數ゟ
屆ゟ

欽明天皇十四年夏六月詔勅醫博士易博士
曆博士等宜依番上下
令上件色人正當相代
年月宜付還使相代又
卜書曆本種種藥物可
付送

賀表○江次第一大臣
以下外記令仰上臈儒士
令作賀表或大臣自作
之

神龜二年○續日本紀
第九聖武天皇神龜二
年十一月巳丑天皇御
大安殿受朝賀拜親
王及侍臣等奉特奇瑞
珍贄進之即引文武
百寮五位已上及諸司
長官大學博士等宴飲

欽明天皇十四年夏六月詔勅醫博士易博士
曆博士等宜依番上下
令上件色人正當相代
年月宜付還使相代又
卜書曆本種種藥物可
付送

賀表○江次第一大臣
以下外記令仰上臈儒士
令作賀表或大臣自作
之

神龜二年○續日本紀
第九聖武天皇神龜二
年十一月巳丑天皇御
大安殿受朝賀拜親
王及侍臣等奉特奇瑞
珍贄進之即引文武
百寮五位已上及諸司
長官大學博士等宴飲

欽明天皇十四年夏六月詔勅醫博士易博士
曆博士等宜依番上下
令上件色人正當相代
年月宜付還使相代又
卜書曆本種種藥物可
付送

賀表○江次第一大臣
以下外記令仰上臈儒士
令作賀表或大臣自作
之

神龜二年○續日本紀
第九聖武天皇神龜二
年十一月巳丑天皇御
大安殿受朝賀拜親
王及侍臣等奉特奇瑞
珍贄進之即引文武
百寮五位已上及諸司
長官大學博士等宴飲

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

我朝のこと小事も大事も中臣忌部の事なれば
(天智天皇十年正月周正月今之十一月辛亥朔日南至公既視朝遂登觀臺以望雲書瑞也)
ずうもれもとべきことはあるべきことなれば
ことめずうもれ事なれぞもれぬみ
てうり十一日の事よいうう
ふしをうくる
(平二) 相嘗祭 上卯日
神祇令云大嘗祭
富(カツラキ)葛木鴨紀伊國日前神等類是也神
官幣をうけたまはるべきことなり
(平二) 宗像祭 上卯日
神社の事なれば
七十一座ともみえたり相嘗と書てあひ
もべき也
同日ヨリ宗像朝臣ト云大巳貴命ノ末葉也 [氏人]宗像君也天武天皇

終日極樂乃寶賜祿各有差

[神祇令云] ○神祇令云仲冬上卯相嘗祭義解
謂大嘗住吉大神宮師恩智意富葛木鴨紀伊國日前神等類是也神主各受官幣而祭

[大嘗] ○大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座 [住吉] ○攝津國住吉郡住吉坐神社四座

[大神] ○大和國大神大物主神社大神朗大三輪也 [宍師] 大和國城上郡宍師坐兵主神社

[恩智] ○河内國高安郡恩智神社二座○文德實錄第二嘉祥三年冬十月辛亥授河内國恩智大御食津彦命神恩智神等並正三位 [意富] 多也 ○大和國十市郡多坐弥志理都比古神社三座 [葛木鴨] ○大和國葛上郡鴨都波八重事代主命神社二座

[宮前] ○紀伊國名草郡日前神社 [神主] ○令集解云大倭社大倭忌寸住吉社津宿連大神社大神氏宍師社宍師神主恩智社恩智神主意富社大朝臣葛木鴨社鴨朝臣ト云

[ムネノカタチ] 胸形社也 ○延喜式神名帳筑前國宗像郡宗像神社三座

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

素盞烏尊ノウミタマヒレ○宗像神、天照太神ノウミタマヒレ神也天照大神勅シテ素盞烏尊兒トレタマヒリ湍織津姫命○湍津姫ノ訛也湍織津姫被所ノ神也阿波良波命傳天照大神荒魂ト云倭姫命世記ニハ八十枉津日神一名トイリ宗像三神内ノ湍津姫ト別神也○田心姫湍津姫市杵嶋姫三女神八天照大神神勅ヲ三神宜降居道中奉助天孫而爲天孫所祭ト云神勅ヲ受テ筑紫洲ニ天降玉フサレハ此神祭事ナヘシ

百四十三 山科祭 二巳日

四月小なり

百四十四 平野祭 二申日

四月小なり

百四十五 春日祭 同日

四月小同一

百四十六 杜本祭 同日

四月小同一

百四十七 當麻祭 同日

同一

百四十八 率川祭 二酉日

二月小なり

百四十九 梅宮祭 同日

四月小同一

百五十 當宗祭 同日

四月小なり

百五十一 中山祭 同日

なし

百五十二 松尾祭 同日

四月小なり

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

よろ申ス日なるべし
西五十三 大原野祭 中子日
二月小初一ニ云ヒ
子日なり
西五西 園韓神祭 中丑日
二月ノ初ノ丑ノ中ノ
賀舎なり此祭ハ丑ノ
日あるべし
西五十五 五節 同日 丑ノ日 丑ノ日ハ
式下ノ丑ノ日ノ間也

中ノ丑ノ日なり五節ノ帳臺試ニハ常寧
殿ニて主上御覧あり又帝葬ノ儀式ハ
人なき所にて行ハるゝ故ニ帳臺ニ
いまゝにて儀式ハ
て帳臺ハ御ス
さゝ
[ ]陸名抄奴婢佐師如此訓乃渡賀蕃漢語抄云絹紬袴或云岐奴乃加利ハ加萬
禁祕抄詳也
事ハ
帳臺試ハ
おさゝ

○裏(うら)衣御指貫浮文織物等御指貫等此寮支也深浅皆共有例
○表袴(うへのはかま)大口
○張袴
○生袴(なまばかま)

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

○文選十一孫興公遊天台山賦凝思幽巖朗詠長川善曰朗猶清徹也翰曰朗高也

○曲謳歌也

○辭宋玉對楚王問云客有歌於郢中者云其曲弥高其和弥寡

○卯日童御覽事雲圖抄詳也吳竹臺圖下下仕參上之道也從承香殿西橋降立庭中南行但到竹臺下下仕從竹臺之西頭令北藏人自東頭行合故實也近代不知案內云東書云童女參御前雲客副之或名扇雲客持參次下仕參載人副之各一所參畢又名他所也江次第云殿上人付童女傳等又云下仕等取几帳三本相從理髮相具○又云藏人頭進向長橋東檻陪從等關入免入之者理髮一人童女二人童髫茵陪從一人近等也不持几帳下仕二人執

外いなりや昔の狩衣袖をくゝりて御前に參りしなり次第不審なる事なり

かゝる野の中にて女御の御裝束殿ふりたる御衣などを着給ふ事如何

○江談抄第一云清淨原天皇之時五節始之於吉野川鼓琴之天女下降出庭前詠歌天女歌云ヲトメカヲトメサヒニモカエタマフヲトメサヒニモカエタマフヲトメノカラタマヲ出本朝月令之由河海抄乙通女巻引之

琴を引給ひし時は人の着給ふ袖を五度斷

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199　　ガラス使用

○又云承平五年無殿上五節寛平昌泰間例云

五節舞姫ヲヨリ ○政事要略第廿七年中行事

廿七 十一月三 仮日節會事 五節舞者淨御原天皇之所制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄尒之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應曲而舞獨入天聽他人無見擧袖五變故謂之五節其歌曰乎度綿度茂邑

九條年中行支 中寅日鎮魂祭事中宮鎮魂同日行之皇后雖懐姙猶行件祭近長三年天徳二年例也又掌侍有障之時以中宮掌侍為代官

中巳日東宮鎮魂事

舊事本紀第二子也 舊事本紀第十二 神代下

天照大神勅曰吾兒所知食豊葦原瑞穂國者是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣於是天照大神乃以天津彦火瓊瓊杵尊授以天璽瑞寶并賜鏡作部遠祖天糠戸命作鏡造鏡并造玉作部遠祖玉屋命作玉造玉

百五十六 鎮魂祭

十一月中寅有二寅下寅行之一月 中寅日 例云而新嘗會前可行之由見式

御鎮魂祭 ○御譲位了也 ○文選四十三北山移文屬萬乘其如脫屣註淮南子曰堯年衰志閑舉天下而傳之舜猶却行而脫屣也許慎註曰言其易也

宇摩志麻治命 饒速日尊第二子也

宇摩志麻治命初降天時以天璽瑞寶奉為帝后鎮祭御魂祈請壽祚其鎮魂之祭自此而始矣

御鎮魂 ○御譲位了也 ○文選四十三北山移文屬萬乘其如脫屣註淮南子曰堯年衰志閑舉天下而傳之舜猶却行而脫屣也許慎註曰言其易也

モノヲテ ○倭名鈔祭祀具採手 漢語抄云葉手比良天

百五十七 新嘗會

文徳天皇 天安二年十一月神祇官卜定悠紀主基國郡

新嘗會事 中卯日

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

てなをもそれさびしくもうたまを
（ヲ）（ヲ）（ヲ）

九條年中行事　中外日新音會事務

早旦供御湯殿成刻以前應齊者潔齊參內裏著靑摺不合御下之親王公卿及諸司候大忌幕時尅天皇幸神嘉殿不称警蹕王卿不少納言率主鈴大舍人等候驛鈴御輿出陰明門」之間候大忌幕之親王以下及諸司等皆立於各幕前王卿立北面西上御輿輿於殿南階上御輿長等相扶而候掃部寮敷筵道此間小忌王卿立西炬大屋南方天皇降輿入自南庭西戸近衛開南中門左右近衛杖候南階東西左近西右近東小忌王卿就座先是中務輔率侍從候座外記史等同在座近衛開門主殿寮先設御湯殿於寢側天皇就之中務丞入安版位於前殿例近代之不必置小忌王卿率弁納言侍從參出自掖門立於南中門西掖大舍人叫閽司就版位奏曰御門故尓神勅曰万都礼闇司傳宣云姓名等參入云々是式文呼指也今見年来之例無勅答但闇司傳宣如式親王執拂笏入自中門外昇於南階跪於神殿戸外掃部官人專取次納言參議等共昇沒先後納言以下大舍人以上昇御畳參入先是左右次将各一人於侍從等分立於階東西遣大見於內裏儀式立殿寮又卿入自西腋門経屏慢南如問之大忌親王以下立幕前之間有御殿祭事

○江次第次給白黒酒各一度稱名給拍手飲之

○左傳昭公元年云先王之樂所以節百事也故有五節杜預註五聲之節

○江次第云擧袖五變故曰五節

○漢書文帝紀贊曰嘗欲作露臺召匠計之直百金上曰百金中人十家之產也吾奉先帝宮室常恐羞之何以臺爲

師古曰今新豊縣南驪山之頂有露臺鄉極爲高顯猶有文帝所欲作臺之處

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

九條年中行事　中外日新音會事　廢務

早旦供御湯殿成刻以前應齊者潔齊參入內裏看青摺不合御卜之親王公卿及諸司候大忌幕之親王以下及諸司等
嘉殿不称警蹕王卿不必納言參上主鈐大舍人等候驛鈴御輿出陰明門之間候大忌幕之親王以下及諸司等
皆立於各幕前王卿立北面西上御輿輿於殿南階上御輿長者相扶而候掃部寮敷筵道此間小忌王卿就座先是中務輔率侍從候座外記史
皇降輿入自南庇西戸近衛開門主殿寮先設御湯殿於寢側天皇就之中務丞入安版位於前殿見近代之不必置小忌王卿率弁納
等同在座近衛開門主殿寮先設御湯殿於寢側天皇就之中務丞入安版位於前殿見近代之不必置小忌王卿率弁納
言侍從等出自掖門立於南中門西掖大舍人叫閉闔司就版位奏曰御暫參入止乎官姓名等謂親王以上叫
事了引還出給供奉之間帶劍者也欲者座之時又帶之亥一刻所司供夕供神物次第行事具見於內裏儀式主殿寮交
門故尓申勅旨万都礼闔司傳宣云姓名等參入云々是式文所指也今見年來之例無勅答但闔司傳宣如式親王執拂笏入自中門外昇於南
供御湯殿母屋二剋供暁供神物撤脫了大舍人叩門王卿以下昇出御輿等如入儀了王卿入自西腋門經扉慢南如
階跪於神殿戸外掃部官人傳取次納言參議等共昇坂枕參入侍從以下大舍人以上幇御暫參入先是左右次將各一人於
初列立於西庇次屋南主殿寮進御輿天皇還本宮御輿出中和門之間近衛次將問之各々名對面如常此夜天皇未歸本殿之間有御殿祭事如式者
名對面還御之後於南殿前左近次將問之各々名對面如常此夜天皇未歸本殿之間有御殿祭事如式者
宮之後有儀式可有供奉云云又還御之間近衛大忌陣或時相副於小忌陣祗候是已違式文也被礼仰之由見延
而今所行者如此云云
喜十一年十二月十五日延長二年十一月廿一日御日記云々
辰日踏哥事　標法同正　月七日
天皇御南殿左右近衛引陣御座定称警蹕大臣者亂着之子內侍臨檻召人謝座昇殿着座次皇太子昇自
同階謝座謝酒就座近衛兵衛開門闔司出於弓場殿居承明門東西掖大臣召舍人二聲舍人共称唯少納
言就版大臣宣召刀祢称唯出召之親王以下參入如常儀但小忌親王以下參議以上一列入自承明門東扉次大
忌親王以下參議以上入自同扉次小忌大忌五位以上東西分頭參入小忌少用西扉大忌分於異位重行小忌參議
列在前謝座謝酒者了內膳益供肴物次供臼貴御酒次賜臣下王卿欲
受盃而先抱手次献黒酒次第如先觴行一両周國栖奏歌笛献御贄如常三献後奏御酒勅使如例大歌於
承明門外發音聲是詞未字大歌別當親王已下下殿經東掖北西而出自承明門就東掖座是整具
歌人等也此間左兵衛陣爲酒肴於別當親王以下參入如常儀但小忌親王以下參議以上一列入自承明門東扉次大
忌親王以下參議以上入自同扉次小忌大忌五位以上東西分頭參入小忌少用西扉大忌分於異位重行小忌參議
列在前謝座謝酒者了內膳益供大膳益賜

九條年中行𡸴　中外日新會事廢務

早旦供御湯殿成刻以前應齊者潔齊衣冠[ナリ]
[ヲ]
[ヒ]
[ヲ]
[ヒ]
[ヲ]
[ヒ

摺巫 ○ 古事摺事文桐竹也

日本紀主 ○ 神代巻上 天照大神嘗新嘗時

ど十三也其外いろ〳〵次第を
引猶と称すを乃始ふい大嘗會と
會ごと也下令乃人を摺衣日蔭を
的天皇二年冒ごと新嘗乃事なり
まる大ごと神代ごと事おこまごと事
紀もて照大神ごと
すごと
百王八 代ごと節會 中辰日
皆ごと乃猶と称すごと世ごと
イニハニイナスキコ・シメス

○江次第次給白黒酒各一度稱名給拍手飲之

○左傳昭公元年云先王之樂所以節百事也故有五節杜預註五聲之節

○江次第云樂袖五變故曰五節

○漢書文帝紀贊曰嘗欲作露臺召匠計之直百金上曰百金中人十家之産也吾奉先帝宮室常恐羞之何以臺爲師古曰今新豊縣南驪山之頂有露臺鄉極爲高顯猶有文帝所欲作臺之處

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199　ガラス使用

フンノツカサニ沙コトメス
○源氏繪合巻ニアスノツカサ御コトメシイテ河海抄
圖書寮祓納累代樂器所也

悠紀主基由紀天神ヲ祭主基地祇祭也
○日本紀天武天皇五年八月丙戌神官奏曰爲新嘗(ニヘ)國郡(ヲ)卜(ス)齋忌(此云踰既)則尾張國山田郡次(ニス)齋忌(此云須岐)則丹波國訶沙郡並(ニ)卜(シ)私記云湯者潔齋之義也由紀者任波比支異麻波萬之辭也主基者次於齋忌也今稱主基者訛也先師說主基者相繼于湯(ニ)同可齋忌之故

公事根源下

三十三

○建暦二年七月廿五日清水寺法師建立一堂其地在清閑寺領之由彼寺憤訴相論之旨清閑寺爲台嶺之末寺山又咎之清水寺依爲南都末寺奈良殊怒而八月三日清水寺橫雜山僧集會于長樂寺白公家先遣檢非違使有範惟信基清等破却之城制止武備急著法衣可在佛前之旨被仰合寺僧承伏之相次遣廳官長吏於長樂寺被禁制之處所司法師等僅相逢更無承伏之詞惡僧等妄吐奇怪之詞殆及放言

圖書寮也

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

宮爲遁當時恥退去
之間飛礫打開扉馳歸
基聞之閉忍彼御北面
之輩竝在京傑士近臣

笑花院御幸
先亥日小弦樂調樂
庭燎
(花鳥餘情云賀茂臨時祭排頭使三勝舞)
(清輔集云路時祭ノ舞人陪從ノ裝束ノ事ヲ南
ノ庭ニテ調ルナリ)
花鳥餘情云賀茂臨時祭ノ排頭使ニ勝舞
(清輔集云路時祭ノ舞人陪從ノ裝束ノ事ヲ南
ノ庭ニテ調ルナリ)
使葬人陪從
(清輔朝臣云陪從ハ統ヲ朝臣ノ裝束ノ事ヲ
ノ庭ニテ調ルナリ)
(花鳥餘情云賀茂臨時祭ノ排頭使ニ勝舞
使葬人陪從ニ山吹ト
小二行舟座ヲ
後小李朱ノ神樂ノ
(懸額處也里第儀無額
乃間ノ庭ニ
及狼籍剛甲冑相具之
令參殊預感感凡生虜
二十人被誅者十餘人
也同六日山門衆徒悉
離山打付中堂常行滅
三昧堂燈截落七社以
下御簾神鏡鑽開門追

(神祇官云某台佛法及
魔滅期歟見東鑑二十二
○雲圖抄云還立御神
樂賀茂儀也翌日有御
物忌之時或止之
石清水儀無御神樂有
御前儀近代絶了
○江次第云次人長名
笛篳篥琴歌等笛本篳
篥末和琴本一歌本二
歌末依人居分畢次笛
篳篥相和
勸盃柱下類林十七帙
第三儲君部勸盃作法
事佐示曰跪飲了起授
盃可唱平歟而藤中納
言曰如造酒司先不可
飲只受酒可授盃云由
敎訓亮範朝臣此条未
是非了又件盃居盤之

長階ノ北ヲ階ノ下ヨリ
人ヲ上ヲ勸盃アリテ神樂アル座ヘ
(松風卷河海抄近衛舍人隨身也神樂人長ノ被管役也)
ヲ
○古今冬ノ賀茂祭上云晝儀抄云冬ノ賀茂祭ノ
イニメ王侍從ト申時賀茂ノアタリニテ御狩ヲ給ニシ時云々
小賀茂ノ

百六十二　実従法阿弥

先為日小試楽調楽なくいかの事ありて南
日乃儀式御覧遊乃ありて社頭乃義ありて使葬一人帰りた
（人数陪従六山吹とそ）
ありき也乃儀ありて孫庇小松陽ありて使葬人ありくし
小二行ありて小松末乃神楽乃ありて使葬人陪従ありて
（江次第六挿）
御小階乃下乃草鞋とめて（懸額處也里第儀無額）御前乃ありて南
御小階乃下乃ありて使葬人帰りた

下酉日

官人台佛法及
魔滅期懸見東鑑二十二
○雲圖抄云還立御神
樂賀茂儀也翌日有御
物忌之時或止之
石清水儀無御神樂有
御前儀近代絶了
○江次第云次人長名
笛篳篥琴歌等笛（本篳篥）
（本和琴）（本一歌本二歌末）依次居分畢次笛
篳篥相和
勸盃（柱下類林十七帙）
第三儲君部勸盃作法
事佐示曰跪飲了起授
盃可唱平殿而藤中納
言曰如造酒司先不可
飲只受酒可授盃云由
敬訓亮範朝臣此条未
是非了又件盃居盤之

長階乃下乃ありて（江次第六挿）小松陽乃ありて
（松風巻河海抄近衛舎人随身也神樂人長ハ被管役也）
人長とも乃ありて神樂ありて庭燎
ともありて（ノラ）ありて（ノラ）舞人乃ありて
庭火ともありて（ノラ）ありて神樂乃ありて
（古今冬ノ賀茂祭上云晝儀抄云冬ノ賀茂祭ハ臨時祭ヲ云其濫觴ヲ事ハ宇多御門
（イ本王侍従ト申時賀茂ノアタリニテ御狩ノ給ニシ時ニ云ヘ）
小松陽乃ありて（ノラ）ありて神樂乃ありて
ありて（ノラ）ありて神樂乃ありて
ありて（ノラ）ありて神樂乃ありて

由藤中納言存之云々
客云跪飲了弃酒濁飲了可唱
居又受酒授盃了可唱
平至次々之人者乍立
受酒自不歌之授盃可
唱平歟如藤中納言存
知者可為献盃歟代記
勸盃之由皆記之跪条
又無不審歟土器也可
在此等之由説之

國忌 職員令義解國忌
謂先皇崩日也
崇福寺 弘仁十年崇福
寺近江國志賀郡號志
賀寺天智天皇御願
朱鳥二年 朱鳥八 天武
天皇ノ年号 朱鳥八一年
ニ終ノ其明年八持統
天皇元年也
中興 祖庭事苑第六巻
云王室中否而再興謂
之中興如周之宣王漢
之光武唐之中宗
天智天皇八朝敵蘇我
入鹿ノ誅シ天下ノ治
玉ノ故ニ中興ノ主ト云

百六十四 大神祭

三箇日

上卯日

百六十五 國忌

天智天皇 御國忌
御斎会 宮中 薬師寺
朱鳥二年 崇福寺
天智天皇 御願
大津宮 志賀郡
おりゐたまふなどぐうつりめ事と成

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

ふきそ祝儀ともや
百六十六 御雑掌ト奏 十日
是も六角小松の
ときく御ト奏聞陣の座
まろの年六角堂の事残らず
こと乃神法あるべきのよし
うけ給はるべきのよし
百六十七 同次第神今会 十一日
百六十八 御佛名
十九日

北村氏云 江家次第十一云貞観十三年九月今格應安置一万三千畫佛像七十二鋪事元興寺
大師賢璦奏状先師故律師靜安永和年中奉勅為国家礼拝佛名始行内裏漸
遍天下云々

○雲圖抄二云ゾ地獄變
御屏風七帖立七ケ間
也有細鎮子ゾ等或書云
表紙作御屏風之時用
漢書御屏風
○雲圖抄裏書初夜自
亥ノ一刻至于子ノ二刻後
夜自子ノ二刻至于丑四
刻

南北小机をそろへ佛
小香爐ともをならべ小地獄
變乃御屏風をたて
けさ〻お居のまわりお小机をそひさし小香ゐ
女嬬ともをさせ
初夜中衆従衆を
さ〻あげ人をさせむる

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

ふきそ祇園(ギヲン)ともや
百六十六 御(ゴ)雑談(ザフダン)ト奏(ソウ)
是も六月小祓の
ほきうく御(ミ)トと奏(ソウ)
まろの年六月まて
こと六月祓法無
うつして載也
百六十七 月次祭神今会 十一日
百六十八 御(ゴ)佛名(ブツミヤウ)
十九日

○雲圖抄云地獄變
御屏風七帖立七ヶ間
也有細鎮子等或書云
表紙作御屏風之時用
漢書御屏風
○雲圖抄裏書初夜自
子ノ一刻至于子ノ二刻後
夜自子ノ二刻至于丑四
刻

をふるさ一日まて三ヶ日なり或二
も例あり仁壽殿の御本尊をうつ
て御假の中よりはけく南の方の
南北小机をしそく佛像塔婆を
小香爐うつ紙うつ小地獄
變(ヘン)乃御屏風をうつ家勝(イヘカツ)
れうつ御(ミ)居(ヰ)のうつ松折花
女嬬うつをうつ御(ミ)
初夜中取經取
さうあふうつ人をうつむ

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

○江次第云今夜孟柏梨左近衛府攝津在名也以彼地利所造之其糟也

裏書曰柏梨昔府中將和氣其公攝津國柏梨庄寄左近府以其地利充官人以下酒料云々

綿乃事を衣をこれよりこふ乃事をはしめ小内侍小内侍乃ことを乃くらゐをうけ乃くあ乃ゑ人御厨子所乃ことをつかさとる事をそ乃ことをまてこれをの乃ち柏梨(カシハナシ)乃ことをいふ乃ち柏梨(カシハナシ)乃事をそれいたるまて御厨子所乃ものよ摂津國柏梨(カシハナシ)庄よりおさめ奉る物なるゆへにかくいふなり

○三世諸佛ノ名号一萬三千佛名号也

○佛名經七巻後魏北印三藏流支譯

○佛名經五巻元魏天竺三藏菩提流支譯

叢書叢鈔第九云仁明天皇承和五年ヨリ佛名アリシヲ年ニ有無不定十三年ニ被定置以降用十六巻佛名經此中ニ所載佛菩薩賢聖等名一萬三千餘

乃事をはしめ小内侍小内侍乃ことを乃くらゐをうけ乃くあ乃ゑ人御厨子所乃ことをつかさとる事をそ乃ことをまてこれをの乃ち柏梨(カシハナシ)乃ことをいふ乃ち柏梨(カシハナシ)乃事をそれいたるまて御厨子所乃ものよ摂津國柏梨(カシハナシ)庄よりおさめ奉る物なるゆへにかくいふなり

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199　　ガラス使用

也然ル玄鑒内供上奏ノ
十六巻ノ佛名ヲ略メ延喜式
三十三千佛名經ヲ改修セシメ
遂ニ此ヲ定式トス然レトモ導
師作法ヲ不改於初後必
稱萬一千佛名ト唱ヲ故
實ヘシ

下午日

百六十九 御髮上

義人御ラ法名ヲ付ラレテ
ラ殿寮よりもちひて
ル事ヲ

百七十 立ニ土牛ノ童子像 大寒ノ日

立ル日取ヨリ小法陽師立牛童子ノ像
ヲ門ノ外ニ陰陽師ノ待賢門ノ前ニ青ク牛ノ
形ヲ作リ赤ク彩色ヲ施シ黒ク牛ノ
ヲ作リ美福門ノ前ニ白ク牛ノ
藥祿門ノ前ニ黒ク牛ノ
那芳門ニ黄ニ殿宿遠智門ニ四門ニ
ハ黄ニ

○月令季冬之月命有
司大難旁磔出土牛以
送寒氣

公事根源下

方隅節用 官位相當 方相 幸徳子

先十二日奉諸陵幣者令陰陽寮擇日詫即申官
使いたちも國ごとにくだりゆく
荷前使乃宮乃
使乃立ちこめありき
勅答乃詞も称こそ
ありおくらは十陵八墓ふくめれりふ幣帛
とまつらせ給ふなり（拾芥下本云十陵九墓隨荘廃置之云々）
門御馬ふりそれて
望乃ひさぎ山城國山階よあり音羽
ありて其まま帰
雨をいばくれ久八
ちぐまもる
てもる伊とみ
う法加い泊瀬
天皇乃相原乃
乃御さきにおそ
ごとのくいりおそ

（延喜内藏寮式奉諸陵幣ノ詳也）
（宇治郡也）
（大和國添上郡）
（桓武天皇第卅良親王也）
（在伏見山從東邊二町許入在指荷南野山槻記云伏見山松原申也）（大和國添上郡）
（在嘉祥寺内）

山陵贈皇太后宮茂子
後宇治山陵贈皇太后
忱子鳥羽院母
○八墓　多武峰鎌足
大和國十市郡（汉才淡海公ト云）
愛宕忠仁公　葛野（カトノ）仲野（仲野親王女）親王　或云高畠墓
後葛野當宗氏　或云
河島墓　宇治郡宣公
小野高藤公　後小野
宮道氏　後宇治皇太
后班子　以上八墓
今宇治冷泉圓融母后
合九墓
昔此御門御馬（メサレ）
イトクシキヤウニテ侍キ
○此俗説也又俗説帝
登天シヲニ其ヤウニ馬龍
ノホトリニトニル其龍ノ駒
龍ト名ト云リケレトモ日本

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

紀ヲ見ルニ天智天皇十年
九月ヨリ寢疾不豫十月
疾病弥留十二月乙丑
崩于近江宮ニトアリ萬葉
集ニモ天智天皇不豫并
御病急崩御時太后奉
御歌トモアルハ俗説信スヘカラス

五七十三

内侍所御神樂 雲圖抄以吉日被行之

まことに幸ありそ典侍
いくよいこゝろ本丁を
幸うらめまし御洋刀自稱
所化人菊殿乃西北
七内侍所乃まへ小庭
庭燎をそく 末 詳 雲圖抄詳也
まことに乃石火 メシント 本末座ノ云ヒ也
かくこゝ庭乃小庭 江次第云先鳴高次名對面
そこ見てそ 江次第ニ云人長舞

採物 ○梁塵愚案抄採
物歌注ヒ物神以下皆
手ニトル物也
○江次第云大人長起
名方男數人一一進奉
仕畢人長退 ○又云人
長起名方男頭一人殿
上人一兩人殿上名人
地下名人等各一兩其
人或至庭火前指退或
追續
○江次第云人長立庭
燎前行事次稱人人令
起本末試本末皆起殿社
起人長云主殿寮御火
白住 礼又云掃部寮膝
突給次云名御琴可仕
者其人把和琴著膝突
彈之人長云候本方郎
著本方座上又云名御

うぐひす
幸未乃方和琴次第
てほうまつる人長おもてを
かくこゝ和琴抑子
人長うの採把
てほ人長うてる
江次第人長起舞
かく祢うそ又

笛可仕者同上仰云候本方又云名筆簗可仕者同上仰云候末方又云名御歌可仕者同上仰云候本方又名一人同上候末方次仰云合天仕礼訖人長退次本末座勸盃各三献頭以下取之藏人所瓶子次衛府名人著座次本末打拍子出歌先取物榊御幣等也及韓神人長起舞次盃酌一巡加劔訖人長起名対男頭一人殿上人一兩人殿上名人地下名人等各一兩其人或至庭火前指退或追續人長兩三步進上古多後人長或又有奉仕散樂之者訖佐

（吉く利く得錢つね木綿作。）

（江次第作廻駒ニ）

井波利次星次朝倉路從之歌次廻駒人長起舞云云

○二水記云才男

星 吉く利く本歟ア

カホシ ヒヲ ヒロウトヒヒ星ト云九ヘ

天照大神ノ石ノ戸ノ事

古語拾遺云素戔嗚神為日神所行甚無狀種種陵侮云云于時天照大神赫怒入于天石窟閉磐戸而幽居焉云云今天鈿女命以眞賢木為手繦以蘿蔓為手纏以竹葉飾庭燎之前覆槽置桴擊庭燎巧作俳優相與歌舞

神樂ハ神ヲ祭事ナリ

よ還御ある此御神

何もある事ハ

毒氣乃亂よ

ゐる内ハ不可西海小波御

ゐくる事ある也 都へ

ゐる事ハ御神樂ある

ゐる事ハ御神樂ある

さて祭ハおゝ

樂乃おもしろ

ゐてあるハ

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』　請求記号 848-199
ガラス使用

追儺　○河海抄紅葉賀除夜ニ儺ノ追事也鬼ヤラヒト云追ノ字ヲヤラフトヨム也又儺一字ヲモ鬼ヤライトヨム也始自禁中ニ迄于何家ニ行之ヲ

これをよく綱目（ツナメ）令（シム）まことにうつくしうてひとげをそすきめてこころもとなきをたきうつしへらうまことに事一つまた我朝の風俗神代の縁起化（ケ）よりてくさぐさ

百七十四　御贖物

宮内卿

百七十五　大祓

同

百七十六　追儺（ツイナ）

外記

方相氏　○周禮夏官方相氏掌蒙熊皮黄金四目玄衣朱裳執戈揚盾帥百隷而時儺以索室毆疫註方相猶言放相今雛頭是也

四目（アリ）　○延喜式其方相假面一頭黄金四目

きよめおわらひ取（トル）ものゝ、これい大舎人（オホトネリ）寮鬼（モノ）をとりて面（オモテ）のをかぶりきてこゝろもとなくもの、ごとくに桃の弓あらひ

人くも御殿の方（カタ）にうつくしうて飛（トビ）ちらし夫（ソレ）よりの、東（ヒガシ）の陽（ヨウ）寮（リヤウ）祭（マツリ）をはてゝ

て殿（トノ）の戸（ト）おし門（カド）おし門（カド）こゝもとにて桃の弓あらひ

ものゝごとくにして東庭（ヒガシノニハ）に駒（コマ）曳（ヒキ）てまはすなり

つゝ竹竿（タケサヲ）をもて

追儺（ツイナ）とりおひ年中の疫気（エキ）をとりはらふ

鬼（モノ）とりおひ方相氏（ホウソウシ）の事（コト）

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』　請求記号 848-199　ガラス使用

侫子トテ十八
侫子八人紺布衣八領
内裏（四門ノ三ハル）○延喜式
弐方相首親王已下隨次入テ立中庭陰陽寮儺祭畢親王已下執桃弓葦箭桃杖儺出宮城四門東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門
慶安云二年○類聚國史七十四文武天皇慶雲三年是年天下諸國疫疾百姓多死始作土牛大儺
○園觀應元年記於土御門殿被行追儺右兵兵衛督實音卿行之上卿不參云

おそ給ひけるうへとさくまふしてか
ぬをのれ又侫子ともをして廿人紺布衣
きせるものと辛櫃ニ入て内裏乃四門をま
けらせ庭ニ立て十二月ふりまつる事
ありけり
ふるき慶安云二年小石姓おくに疫痛ふりや病ける
ものを

寫本奥書云
應永廿九年正月十二日書之畢
偏爲嬰兒也外見有憚　内大臣

一本奥書云
石根源抄依所望後成恩寺
關白　兼良公　時生年十九歳　不被見一紙之書
被書進之云々

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』　請求記号 848-199
ガラス使用

書二千公事根源抄集釋一

公事根源抄者所以記二年中公事之根源一也其本意取二國史諸書一令二人知一公事大要一矣是二一子從レ余求二講説一歟世本多レ傳寫之謬余有レ所レ考是正文字亦引二據諸書一以明二其義一名曰集釋應二一二子之望一頃書肆村上氏欲レ鏤二千梓一余謂二註義雖一不レ詳爲二幼學之助一亦不レ爲レ不レ多古曰勿レ以二善小一而不レ爲此亦小利人之善平遂以模印云爾

元祿七年六月廿六日　松下見林書

銅駝坊書肆平樂寺　村上勘兵衛壽梓

追儺　年中行事合註云追儺とふ年中の疫を追拂ふ今もやひふ條氏ふなるやうふ追儺ふ行ふやうふ夜の弓葦の矢をもて伊勢のくにまでおふを射ふ方相氏四目あるおそろしき面をきてこゝの猶予をもつ又假子とて二十人紺の布衣きもゝ者を卒て内裏の四門を先々之慶雲二年より始る

事又類聚云昔顓頊氏有三子亡而為疫鬼一居江水中為瘟龍一居若水為罔両域鬼一居人宮室區隔中善驚小兒為小鬼於是歲十二月命祀官時儺以索室中而驅疫鬼禹東海度索山有神荼鬱壘之神以禦凶鬼為民除害因制驅儺之神

江次第云　中務省以配文弁内侍所近代不然藏人押分配於小壺（殿上雷曲腋異書ニ立筝）戌刻王卿着外辨（西上對座上御北面）行儺者前晦二日廿神已上點定親王大臣以下次侍從以上及巫録内舍人等應預事者（着其外）亥一刻中務丞奉諸門分配簡（着職奉之四枚近代一枚裏書曰分配中務式曰年終又仰察令進内舍人等名其分配門別參議以上二人侍從十人省丞一人内舍人四人大舍人五人四門分配東宣陽門南耒明門西張明門北玄暉門大舍東陽明門上卿見之下參議參議見下侍從座侍從見了返上（自幕下出之）上卿返給丞（分配人不具者上卿于時奉定近代無此事）錄取簡於長樂門召計（吏生代召六位）陰陽寮以桃杖弓葦矢進上卿以下内侍渡南殿（上古繩上當近代不然）又雖有渡御不着御帳内近代殊不出御近仗陣階下（帶弓箭往年着靴近例不着靴）兵衛陣建礼門（今衣衛府公卿着弓壺胡籙六衛將佐座揩笏取弓矢帶弓箭之揩之於壺雖持桃杖并桃矢）次立兼

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』 請求記号 848-199
ガラス使用

追儺　年中行事合註云追儺とは年中の疫を追拂ふ名なれ
やらふそれぞれのやうにおのおの夜のうちなれば夜上の侍臣桃の弓葦の矢をもて門戸
ごとに方相氏四目あるおそろしき面をきて戈と楯とをもつ又侲子とて二十人紺の布衣きもの者と卒てわらは
門をめぐること三度なり。
事文類聚云昔顓頊氏有三子亡而為疫鬼一居江水中為瘧龍一居若水為罔両鬼一居人宮室區隔
中善驚小兒為小鬼於是歲十二月命祀官時儺以索室中而驅疫鬼焉東海度索山有神荼
鬱壘之神以禦凶鬼為民除害因制驅儺之神

江次第云　中務省以祀文付内侍所（近代不然）　藏人押分配於小壁（殿上西戸南腋其高二丈余）　戌刻王卿着外辨（西上對座上卿北面）
衛府帯弓箭以緋幕曳度柱下（弁少納言着其外）　亥一刻中務丞奉諸門分配簡（着靴奉之四枚近代一枚裏
行儺者前晦二日（廿韓已上點定親王大臣以下次侍從以上及巫録内舎人等（近代不然）進奏文（習日早旦令内侍進奏
又陰寮令進次舎人曆名其分配門別（参議以上二人侍從十人省丞一人内舎人四人大舎人五人四門分配東宣陽
門南耒明門西陽明門北玄暉門大舎東陽明門）　上卿見之下（参議参議見下侍從座侍從見了返
南朱雀門西殿冨門北建智門）
上（自幕下出之）　上卿返給永（分配人不具者上卿于時奉定近代無此事）　録取簡於長樂門（召六位）　陰陽寮以桃杖
弓葦矢進上卿以下内侍渡南殿（上古繩上當近代不然）　又雖有渡御不著御帳内近代殊不出御近仗陣
階下（帯弓箭往年著靴近例不著靴）　兵衛陣建礼門（今衣衛府公卿雖腋奉簡持桃杖并桃矢）　方相率侲子
明門開覆盧上蓋陽寮次内豎二人捧弓葦（桃弓葦矢於閤司官人折櫃傳給之女官女官長橋置石戻壇）

參入立殿南三丈（松木把在前侲子八人在後）　王卿率侍從大舎人等列方相後（去兼明門二天西上降両時之壇上陰陽寮
下部八人給饗方相（出自安福殿圖初今自月花門）　仵饗近代不見陰陽師率齋郎入自月華門
凡一人著深沓　立殿讀咒（詞存儀式）　撤饗（同寮人）　方相先作儺聲以戈叩楯三箇度群臣相
兼和呼追之方相經明義仙華門出北廊戸（御物忌時猶度見天暦六年記）　上卿以下隨方相
後度御前出自滝口戸（出自兼香殿馬道向東陣西宮北陣或經南殿前到燈臺之中或其期斜向明義門方）　殿上人於長
橋内射方相主上於南殿密覧還御之時色從人忌最前行逢方相振鼓儺木法師等
穐々事（自有故實）殿上人候御座方護呼（或放格子踏之或自木燈臺（衛之其事無乱極雲圖云行事蔵
南殿庭殿上小庭朝餉壷並折燈臺不開建礼門（儺木振鼓等於臺盤所御殿每間自木燈臺立柱
年中要抄云近衛府公卿皆帯弓箭雖無沙汰可從例次大将儀曰大将及諸衛督皆帯弓箭此事無
所據又不見舊例然近代帯之未得其意（府式少将以上執弓箭之日大中将帯參議以上不執云々侯殿上時如
左右衛門佐帯弓箭或否事　北村氏云不開建礼門於中重行事仍不帯有信向予說不帯之前例
猶可尋之故行親帯之云々　左右衛門督近来帯之次又有不帯之人
諒闇年如常（天暦八長保三年無之依母后四十九日内也延暦夫人喪未葬間無追儺事云々）

應和二
康保二

長樂門外東廊設王卿侍從内舎人等座（西上對座就中親王南面大臣北面）　紺慢曳度柱外（両儀）

参議行事例（承平二年公頼實頼　参議一人行例（天暦九有明天徳元頼忠

国立国会図書館　タイトル『公事根源集釈 3巻』　請求記号 848-199
ガラス使用

848
199

参入立版南三文（松ハ把在前脈子ハ人在後）王卿宰相侍従大舎人等列立方相後（寛平二年以降両時立壇上）陰陽寮下部八人給饗方目（出自安福殿西門）仆饗近代不見陰陽師率齋郎入自月華門（初入自月花門）凡一人著浮沓（寛平式）立版讀咒（詞在寛式）撤饗（同寛平式）方相先作儺聲以戈叩楯三箇度群臣相兼和呼追之方相經明義仙華門出北廊戸（御物忌時猶度之天暦六年記）上卿以下隨方相後度御前出自瀧口戸（出自兼香殿馬道向東陣西宮北廊掃勿執杖近例不然又経南殿前到燈臺之中或其期斜向明義門方）殿上人於長橋内射方相主上於南殿密覧還御之時殿上人息最前行逢方相振鼓儺木法師等種々事（自有故實）殿上人候御座方護呼（或放格子路之或白木燈臺衝之其事無乱極雲圖云行事藏人獻儺木振鼓等於基盤所御殿毎間白木燈臺之柱）南殿庭殿上小庭朝餉壷並折燈臺不開建礼門時衛門不可帯弓箭欤

年中要掃云近衛衛府分卿皆帯弓箭雖無所憑可從例欤大将及諸衛督皆帯弓箭此事無所憑又不見舊例然近代帯之未得其意（府式少将以上執弓箭之日大中将帯参議以上不執云々候殿上時即況於中重行事又已執杪弓掌矢何重帯之哉可尋之）

左右衛門佐帯弓箭哉否事　北村氏云不開建礼門於中重行事仍不帯有信向予說不帯之前例

憚可尋之故行親帯之云々

左右衛門督近来帯之次又有不帯之人

諒闇年如常（天暦八長保三年無之依母后四十九日内也延暦夫人薨未葬間無追服事云々）

参議行事例（寛平二年公頼實頼）参議一人行例（天暦九有明天徳元頼忠）

（應和二康保二）長樂門外東廊設王卿侍従内舎人等座（西上對座就中親王南面大臣北面）紺慢曳度柱外（西儀）

国立国会図書館　　タイトル『公事根源集釈 3巻』　請求記号 848-199

ガラス使用